

文学と風土との関連をめぐって

——アンソロジーの試み——

藤 本 徳 明

はじめに

文学と風土との間の密接な関連を研究することは、近年学界から著しく注目を浴びている分野である。特に金沢とその周辺は、鏡花・秋声・犀星といった、独自の個性と風格をもつすぐれた作家を輩出し、また、そこに取材した多彩な作品群を多く有していることで、文学と風土との間の関係を考察するのに、きわめて好都合な地域と言えよう。

私も、金沢にもつ地縁から、金沢と文学との関わりについて、後記するような様々の角度からの検討を自分なりに進めてきた^{表2}。また、研究は、教育や啓蒙と別であってはならないという見地から、関係する金沢美術工芸大学および金沢大学の授業においても、当地域における風土と文学の関連についての探求をテーマとしたことがある。このテーマは、学生諸君にとっても地域的親近感を得られ、かつ多元的な視点から近代文学および現代文学を読みうるという点で、文学的教養コースのテーマとしては適切であったようである。次に、先述のテーマの編成の一例を示し、そのテキストの一端をあげ、大方のご批評を賜わることができれば幸いだと考える。

次表1の1〜8は、現(近)代を背景とした諸作品、9〜12は、近代以前を背景とした諸作品であり、それぞれを、二作(家)ずつ組み合わせ、共通するテーマによって両者を対比、考察の深化をはかる、という方法を試みた。テキストには最少限の解説を加え、問題点は、

教授者の解説や、担当学生の研究発表によって深化させることになる。むろん、このテキストは、学生にとっては教材となると共に、一般の——とくに地域在住の文学愛好者にとっては、親しみのもてるアンソロジーたりえよう。

表示したもののテキストと解説の全文をあげることが望ましいが、制限枚数の関係から、全体の中でも、金沢の文学を代表する泉鏡花・徳田秋声・室生犀星の三作家のものを例示するにとどめた。なお、全体としては、後掲近刊予定の拙著「北陸の風土と文学」に収録することはとなつている。また、解説その他は、注記した拙著や拙論の内容と、一部重複するところのあることをお断わりしておく。

表1 金沢(北陸)に取材した文学

1 故郷としての金沢	泉 鏡 花
「照葉狂言」「縷紅新草」	
2 「町の踊り場」	徳 田 秋 声
詩から小説へ	
「性に眼覚める頃」	室 生 犀 星
「城砦」「北国」	井 上 靖
3 抵抗の系譜	
「地上」	島 田 清 次 郎
「歌のわかれ」	中 野 重 治
異端の情念	
「美しい星」	三 島 由 紀 夫
「聖者が街へやって来た」	五 木 寛 之

5	他者の眼 「雪の下の蟹」 「金沢」	古井由吉 吉田健一
6	屈折する情熱 「火にも水にも」 「無名碑」	深田久弥 曾野綾子
7	典雅な悪女たち 「雪燃え」 「恋の巢」	円地文子 立原正秋
8	怨念の惨劇 「ゼロの焦点」 「死者だけが血を流す」	松本清張 生島治郎
9	信心と反逆 「新平家物語」 「無明」	吉川英治 真継伸彦
10	土俗の伝奇 「眠狂四郎殺法帖」 「平家伝説」	柴田錬三郎 半村良
11	行動者の挫折 「海の百万石」 「武辺往来」	舟橋聖一 中山義秀
12	流浪の芸術家たち 「虚空遍歴」 「嵯峨野明月記」	山本周五郎 辻邦生

表2 金沢と文学についての、関連する拙著および拙論

1 文学と風土についての総括的考察

A 単行本

- ① 「金沢の文学」中の「近代小説」
- ② 「加賀能登の文学」中の「近代小説」
- ③ 「文学の旅（北陸・能登篇）」中の「ふるさとの古典」

- ④ 「日本の旅路（北陸・能登・佐渡篇）」中の「ふるさとの名作二十選」

- ⑤ 「北陸の風土と文学」（近刊予定）

- ⑥ 「日本海のロマン」（近刊予定）

B 雑誌論文

- ⑦ 「放浪する聖者と汚れた聖女——金沢の文学風土における人間像」（金沢美術工芸大学学报）

- ⑧ 「北陸の文学風土における女性像」（仏教文化）

- ⑨ 「裏日本の文化的可能性——白山文化圏を考える」（日本の底流）

- ⑩ 「異端の系譜——郷土の文学的伝統」（自治と教育）

C 新聞掲載文

- ⑪ 「金沢の文学風土」（中日新聞）

- ⑫ 「創造の母胎裏日本」（同）

- ⑬ 「裏日本と裏文化」（北陸中日新聞）

- ⑭ 「したたかな美女の城」（同）

- ⑮ 「鏡花賞と地方文化」（同）

- ⑯ 「宗教における情念の復権」（北国新聞）

- ⑰ 「現代文学にみる宗教性」（同）

- ⑱ 「日本海のロマン——伝承・文学にたどる北陸史」（北陸中日新聞に連載中）

D 放送

- ⑲ 「越のころ」（北国新聞に共同執筆で連載）

- ⑳ 「北陸の女・文学風土の中の女性像」（MRO・KNB・FBC）

- ㉑ 「金沢の精神風土」（NHK）

E 学会発表

- ㉒ 「金沢の文学風土における人間像」（文学風土学会全国大会）

A 雑誌論文

- ㉓ 「母胎のロマン——鏡花文学における聖界」（鏡花研究）

- ㉔ 「狐妻説話覚え書」（日本文学）

- ㉕ 「朱鷺の墓・作品の構造」（国文学）

B 放 送

②⑥ 「島田清次郎」(NHK)

C その他

②⑦ 「金沢の文学風土と『朱鷺の墓』」(五木寛之作品集月報)

本 文

(1) 故郷としての金沢

照葉狂言

泉 鏡 花

我が居たる町は、一筋細長く東より西に爪先上りの小路なり。

両側に見好げなる仕舞家のみぞ並びける。市中の中央の極めて好き土地なりしかど、此町は一端のみ大通りに連りて、一方の口は行留りとなりたれば、往来少かりき。朝より夕に至るまで、腕車、地車など一輛も過ぎるはあらず。美しき妾、富みたる寡婦、おとなしき女の童など、夢おだやかに日を送りぬ。

日は春日山の巔よりのぼりて粟ヶ崎の沖に入る。海は西の方に路程一里半隔りたり。山は近く、二階なる東の窓に、彼の木戸の際なる青楓の繁りたるに蔽はれて、峰の松のみ見えたり。欄に倚りて伸上れば半腹なる尼の庵も見ゆ。卯辰山、霞が峰、日暮の丘、一帯波の如く連りたり。空蒼く晴れて地の上に雨の余波ある時は、路なる砂利うつくしく、いろいろの礫あまた洗ひ出さるるが中に、金色なる、又銀色なる、緑なる、樺色なる、薫色なる、細螺おびただし。轍の跡といふもの無ければ、馬も通らず、をさなきものは懸念なく踞居てこれを拾ひたり。

(「仙冠者」より)

縷紅新草

泉 鏡 花

あれあれ見たか、

あれ見たか。

二つ蜻蛉が草の葉に、

かやつり草に宿をかり、

人目しのおと思へども、

羽はうすものかくされぬ、

すきや明石に緋ぢりめん、

肌のしろさも浅ましや、

白い絹地の赤蜻蛉。

25 雪にもみちとあざむけど、

世間稲妻、目が光る。

あれあれ見たか、

あれ見たか。

△解 説▽

泉鏡花(明治六〇昭和一四)は、金沢の文学的風土を最も典型的に体现した作家である。金沢の彫金・象嵌細工師泉清次を父とし、江戸の鼓師の娘で、宝生流の能楽師の妹である鈴を母として生まれた彼は、金沢と江戸の美術・工芸・芸能の伝統を血肉化してこの世に生を受けたことになる。

十歳にして母を失ったが、亡母憧憬の念は、麻耶夫人信仰や観音信仰、また郷土愛や母性的美女讃仰のモチーフとなって、彼の作品群のライト・モチーフを形成した。

専門学校(四高)受験に失敗して上京、尾崎紅葉の門下生となり、明治二八年、観念小説と呼ばれた『夜行巡査』や『外科室』で世に出たが、翌年の『誓之巻』『照葉狂言』などで、年長の美女への清純な思慕の中に金沢における少年時代を追憶し、その本領を発揮するに至った。

維新の激動の中で困窮を深めた職人の家に育ち、芸妓出身の女性を妻とした彼は、近代の俗物的、金権的秩序を憎悪し、これに抑圧される庶民、ことに女性への同情を終生の主題としたといつてよい。こうした発想は、維新の潮流に乗り遅れた故郷金沢の史的位置とも微妙に

照応するものを持っているのである。

初期の『義血俠血』（『滝の白糸』の脚色名で名高い）以来、絶筆となった『縷紅新草』に至るまで、彼ほど多くの作品で加賀金沢に取材した作家は他にない。

偏奇で非近代的な作家ともされ、自然主義全盛期には不遇に苦しんだ彼だが、近代日本にはまれなロマン主義と幻想の文学の巨匠として、今日再評価の声は高い。彼を敬愛する故郷の市民は多く、生誕百年の昭和四八年には金沢市は泉鏡花文学賞を制定してその業績を顕彰することになった。

ここに引用したのは初期の『照葉狂言』（明治二九年「読売新聞」に発表）と、後期の『縷紅新草』（昭和一四年「中央公論」に発表）の各一部分である。

前者は、主人公の少年の眼に映じた金沢の風景で、1〜6行には、鏡花の生地下新町（現在尾張町）付近のたたずまいが、見事に示されている。「美しき妾、富みたる寡婦、おとなしき女の童」など、女性たちに焦点をあて、次いで「卯辰山」などの「峰の松」といった美しい自然に視野をひろげる鏡花の金沢把握は、現在卯辰山麓の句碑「はこひし夕山桜峰の松」にも典型されているところである。卯辰山と、その麓を流れる浅野川は、出世作『義血俠血』で、白糸と欣弥の出逢いの場として描かれて以来、鏡花酷愛の文学風土であった。絶筆『縷紅新草』も卯辰山麓の東山寺院町を舞台としているのである。7〜11行で、大景を遠望、12〜15行で路地の片隅を細密描写しつつ、共に彩色豊かに明治初期の金沢を形象する手法は、映画的でもあり、しばしば前近代的とされつつ、事実は超近代的な文学的可能性をも秘めていた鏡花の天才がよく示されているところだといえる。

後者は『縷紅新草』の序詩ともいうべきもので、この作品の影のヒロインともいえる薄倅の美女の生と死を妖艶に歌ったものである。この美女の生と死は、若年のときの『鏡声夜半録』のモチーフでもあ

ったが、その女の墓を、作者の分身ともすべき老人が自分の美しい姪と共に詣でる、という墓参小説で、モチーフも、成立のいきさつも、故郷金沢を愛しつづけた作家の最後の作品にふさわしいものであった。

町の踊り場

徳田 秋声

私は故郷における生活の大部分を、K—市のこの領域——といっても相当広いが——に過したので、若いその頃の姿をこの背景の中に見出しつつ、だんだん賑やかな処へ出て行った。すでに晩年に押し詰められた私達のこの年齢では、故郷は相当懐しいものであつていい筈だが、私の現在の生活環境が余りに複雑なためか、或ひは私の過去の生活が影の薄いものであつたためか、他の田舎町を素通りするのと、気持に大差はなかつた。……

綿の詰まった口、薬物の反応らしい下縁の薄紫色に斑点つけられた目、ちやうどそれは、土の人形か、胡粉を塗った木彫の仏像として思はれない首が、持ちかへる度に、がくり——とぐらついた。私は抱かれたり、負さつたりした私の幼時の姉、又は皆んなでカルタ遊びをした私の少年時代の姉、それからずっと大きくなって、すでに戯曲や小説に読み耽るやうになった頃、誘ひ合せて浄瑠璃など聞きに行った頃、何かした拍子に、ふと鼻についた姉の肌の匂ひなどを仄かに思ひ出してゐた。雪国の女らしい白い肌をした姉は少し甘い脇香をもつてゐた。

△ 解 説 △

徳田秋声（明治四〜昭和一八）は、日本自然主義の代表的作家であり、泉鏡花とは、共に硯友社に入り、尾崎紅葉の門下として出発しつつ、対照的な文学的閱歴を持った人である。加賀藩家老の家臣雲平の三男として横山町に生まれたが、継妻の子であり、幼時から病弱、かつ家庭も没落士族として窮乏していた。複雑な家庭、ひよわな生い立

ち、家計の窮迫と、鏡花と生育の条件は酷似し、生年や生地も近かったのに、鏡花は、絢爛たるロマンティズムを開花させ、秋声は、重厚なりアリズムを結実させたことは、比較作家論的にも興味ある差異点である。

当初硯友社では志を得なかった秋声も、藤村の『破戒』（明三九）、花袋の『蒲団』（明四〇）などに始まる自然主義盛行の中で文壇的地位を確立、『足跡』（明四三）『徼』（明四四）などは、自然主義文学および私小説の画期的傑作とされている。

この両作でも妻や自己の生活を、徹底的に主観を殺し切った描写で描きぬいた秋声は、北陸路特有の生命への粘着性と、金沢に盛んな浄土真宗の凡夫信仰を、最も芸術的に形象化した人と言えるかもしれないのだ。

鏡花と異なり、秋声は、金沢を描いた作品は必ずしも多くなく、故郷に取材した短篇の集成『古里の雪』（没後の昭二二年刊）も十一篇を載せるのみだが、その中では本書に抄出した『町の踊り場』が、彼の創作歴にとって重要な意味をもつ傑作である。

『町の踊り場』は昭和八年「経済往来」に発表されたものだが、これは川端康成によって「神品」とまで激賞された。それが従来スランプに陥っていた秋声を再起させ、後年の輝やかしい名作群を執筆する足場を確保させたともいえるからである。

1〜7行めの前半の描写にも、かなり乾いた、故郷や親族への眼がうかがわれるが、後半8〜10行めの姉のなきがらを描いても、非情なまでに客観的な彼独自の観察眼が示されている。

ただ、最終行は、川端も指摘しているように、「不思議になまなまし」く、「歌舞伎の老優の踊がふと見せる色気のようなもの」を示しており、鏡花などの「あの意識的な、考え方によっては浅間しい精進」とちがって、全体として、秋声には「解脱に遊ぶ心境のありがたさ」とか「怠慢の妙味」ともいうべきものがある、とする川端の『町

の踊り場』評の一節は、対照的な金沢の両作家の持ち味の違いをも鋭く指摘したものととして、見事な批評たりえている。

晩年、軍部の圧迫を大作『縮図』にこうむったとき、「妥協すれば作品は腑ぬけになる」として、自ら筆を折ったところにも、戦時体制下に真向から軍部を批判しつづけた秋声の親友桐生悠々と同様、逆境の中ではぐくまれた、北国の人秋声の反骨の強さが遺憾なく発揮されている。

戦前・戦中に、基本的には独自の美意識を守りつづけた鏡花や犀星、「転向」の中で最大限の抵抗を試みた中野重治らと共に、北陸金沢ゆかりの人々の外柔内剛の叛逆精神の流れをここに見る思いがするのである。

(2) 詩から小説へ

性に眼覚める頃

室生 犀星

いろ青き魚はなにを悲しみ

ひねもす空を仰ぐや

そらは水の上にかがやき互りて

魚のぞみとどかず。

5 あはれ、そらと水とは遠くへだたり

魚はかたみに空をうかがふ。

(明治三十七年七月処女作)

朝朝の目ざめはいつもぼおとした熱のやうなものが、^{まぶた}瞼の上に重く蜘蛛の巣のやうに架^かかっている、^{もろ}私はうとしてもとりのけられ

10 ない霞のやうなものが、そこら中に張りつめられてゐるやうで、^{もろ}懶い毎日がつづいた。

私はふらふらとそとへ出た。

霧^{あられ}が二三度降ってきから、国境の山山の姿は日に深く、削り立てたやうな、厚い積雪の重みに輝いてゐた。^{かほ}積の草はすっかり穂を

15 弱しながら、いまは蕭蕭とした荒い景色のなかに顛へて、もう立つことのない季節のきびしい風に砥がれてゐた。誰しも北国に生れたものの感じることであるが、冬のやってくる前の息苦しい景色の単調と静止とは、ひとびとの心にまで乗りうつって、なにをするにも鈍な、かじかんだところが出て来るのであつた。

20 向河岸の屋根は曇った日のなかに、そらと同じい色にぼかされ、窓窓の障子戸ばかりがさむさむと水面に投影してゐるのが眺められた。

△解 説▽

室生犀星（明二二〇昭三七）は、金沢市ゆかりの作家の中でも、というより、日本の近代作家全体の中でも、その生涯に、最も多彩で巨大な文学的発展・変貌をとげた作家のひとりである。

少年時代は俳句に親しみ、やがて詩人としても、『愛の詩集』、『抒情小曲集』などで近代抒情詩の一つの高峰をなした。ついで、小説にも手を染め、『幼年時代』を処女作とし、『性に目覚める頃』その他の自伝的抒情的作品によって、小説家としての確固たる地位をも築いた。詩作や芭蕉研究にも専念するかたわら、いわゆる市井ものの傑作『あにいもうと』などで新分野を開拓。戦時中は王朝物に沈潜していたが、戦後は、六十八歳という老年期にありながら、生涯の最長編『杏っ子』で昭和三三年度読売文学賞をえ、評伝『わが愛する詩人の伝記』でも同賞を受賞、古典に取材した作品『かげろふの日記遺文』では野間文芸賞を得、『蜜のあはれ』や『われはうたへどやぶれかぶれ』などでは前人未踏の文学世界を創造したともいえる。

この『性に目覚める頃』は、犀星の詩から小説への転機の時季である大正八年「中央公論」に発表された作品であり、内容自体詩作に志す文学少年たちのみずみずしい心情の世界を描いたものである。

この作品では、その生活と環境はかなり美化されて書かれている

が、犀星の、最も著名な詩と言える「小景異情」の一節には、故郷に対する、愛憎併存する両義的な情念がにじみ出ており、それは、金沢で不幸な幼年を送らねばならなかった犀星にとって切実きわまる情念なのでもあつた。

ふるさととは遠きにありて思ふもの

そして悲しくうたふもの

よしや

うらぶれて異土の乞食かたろとなるとても

帰るところにあるまじや

犀星の本名は照道。妻を失った元武士と、その女中のあいだの私生児として生まれ、七歳で犀川べりの兩宝院にひきとられた。その養母は、「馬方ハツ」のあだ名をもち、酒乱で、子どもらを打擲ちやうちやくすることを恐るべき女であつた。生母とはついに生前に相見ることなく、やさしかった義姉も芸妓として売られている。こうした不幸な生い立ちが、犀星の人間認識を屈折したものとしたのは当然なことであつた。

ただ、生家兩宝院のかたわらを流れる犀川だけは、多感な少年の心を慰めてくれるものであつて、そういう感情は、「犀川」と題する次のような詩の一節からも読みとりえよう。

うつくしき川は流れたり

そのほとりに我は住みぬ

春は春、なつはなつの

花つける堤に坐りて

こまやけき本のなさけと愛とを知りぬ

犀星という号自体が、犀川から取られたものであり、現在、犀川のほとりに、犀星の文学碑もある。

さて、8行め「朝朝の」以下の心情描写は、いかにも詩人の青春の散文にふさわしく、詩的、官能的に、「性に眼覚める頃」の鬱々たる

心理を把握しえている。

13と22行では、そういう心理は、北国の晩秋から初冬にかけての犀川畔の自然の推移と相交流しつつ、そういう抑鬱された感情こそが、主人公の文学的意欲の発条でもありうるといふ機微を示唆しているようにも思われる。

のちに犀屋は、「私の文章は甚だまはりくどく、或る批評家が悪文だとも言ったほど、読むのに面倒な文章であります、その文章にあるまはりくどいところや、ねばり気のある、その底の方を掻き分けて見ますと、北国の悒鬱な気候がいつの間にか、私の心をそめものを染めるやうに染め、そして文章にもそれが現はれてゐるのであらうと思ひます」と講演で述べてもいるが、その述懐は、そのまま本文の解題でもありえていると思われるのである。

なお、作中に引用された詩の処女作は、可憐で繊細な小品ではあるが、「水」底のように鬱屈した生の中で、文学的名声の「空」をひねもす「仰ぎ」「のぞみ」見ていた「性に眼覚める頃」の少年詩人——つまり若き日の犀屋自身の、心象風景としても読める点で、興味深いものを持っているのである。

最初は、こうした、谷間の小さな溪流のような存在として出発しつつ、やがて、さまざまな支流を集めて巨大な流れとなったという点で、犀屋の生のあり方自体が、彼の愛した犀川の流れ——たぶん、それよりもさらに雄大な河の姿を連想させるのは、ふしぎな因縁といふべきだろう。